

リレー随想

前回に続き、私の結婚式の話。会場として確保した労働会館のホールは、かなりの人数を収容できるのだが、それでも三百人近くを一度に入れるのは無理だった。午後一時から二時半までと、四時から五時半までの二回に分けて、結婚披露宴を行う予定であった。

一回目の披露宴が終わり、二回目の披露宴が始まるまでの間は一時半。受付などを考えると、一時間くらいで会場の模様替えをしなければならぬ。

お茶とケーキだけの披露宴で、テーブルの上にそんなにものは乗っていない。終わったらすぐに片づけられるよう、ケーキを載せる皿やコーヒーカップなど、なるべく紙製にして、作業が簡単に済むよう心がけていた。一回目の招待客が退場すると同時にどうか、退場に合わせ、会場の整理が始まったようである。

一回目に招待した人の何人かはそのまま残って、会場の後片づけ、そして次の披露宴の準備など手伝ってくれていた。そう

舞台裏

土地家屋調査士

田口 一法さん



も、私たちのために大勢の人やものが動いているのを目の前にすると、申し訳なくて、じっとしていられるものでもなかった。

時間が近づくと、水上村の湯山から、トルストイ研究家の北御門二郎氏、横浜から児童文学者の長崎源之助氏がいらして、控室の方をのぞきに來られた。二回目には、家内がやっていることも文庫のこともたちも招待しているが、その子らが集まったのだろう。外が随分とにぎやかになった。

北御門二郎氏は、トルストイ三部作の翻訳で、日本翻訳大賞を受賞された。私も名前だけは知っていたが、お会いするのはこの時が初めてであった。

長崎源之助氏については、後日お話しできると思うが、家内が言うには、「大物」なのだそう。小学校三年生の国語の教科書に「つりばしわたれ」という作品が掲載されている。何度か文庫の方にも来ていただいているみたいだが、こちらも私は初対面だった。

北御門二郎氏と長崎源之助氏には、後であいさつをお願いしている。どちらも家内の関係だが、お二人のスピーチも、うまくい具合にこの随想で報告できればと思っている。

(熊本市花園、46歳)

いった人は、エプロン持参で披露宴に出席してくれていたのかと思うと、本当にありがたかった。

外で、招待した人たちを見送って会場に戻ると、右のような状況だったので、私も手伝おうと上着を脱いだが、控室でおとなしくしているようにいわれ、それに従った。とはいって